

## 誠実の人

## 菊地覚助氏を憶う

前道立小樽水産高等学校長

飛 鳥 貫 治

畏兄菊地覚助さんが、4年間の病床にあって、奥様を初めお子様たちの手厚いお看護、ことにお見舞に度々うかがって幾十年苦楽をともしられた奥様ならではと涙のこぼれるような思いを感じた奥様の、あの心尽しも、その甲斐なく、遂になくなられたことは、明治39年私が水産学校の第2期生として入学したその年より、60年近い長年月、学校の先輩としてまた仕事の上にも、深い関係を続けて来た菊地さんであっただけに、いろいろの思い出が浮かんでくる。菊地さんは20有5年間人里離れた、あの千歳の山中に勤められたが、自分の受けられた、その専門の技術を生かし、その事業によって水産業ことに鮭鱒の増殖に裨益せんとする、強い決意を以って、ややもすれば自分一身の榮達利欲のために、職を離れまたは転向することが当たり前であると思われ勝ちのこの世相に、なんらかかることを省みもせず、ただ一筋にその道に尽された誠実さと、その真剣なる努力に、只只感激するとともに菊地さんの偉さを強く感ずるのである。水産学校（現在の小樽水産高校）の創立は、札幌農学校第1

期の卒業生であり、道の初代水産課長であった伊藤一隆氏を初め、和田健三、藤村信吉氏など、宗教的信仰も強く持たれた方々によって出来上がったため、その教育、ことに創立当初の方針は、精神的方面に重点がおかれ、強い努力が払われたのである。第1期の生徒は中学その他を中退して、受験し選ばれた人が多く、したがって年齢も他中学校生徒に比べて多かったので、理解力もあり、教育も徹底し易かった。なおかつ第1期の生徒としての、建設的気魄と誇りを持ち、同時に生徒数もわずか40名であったので、教師と生徒が一体となつての親しさ睦じさまた教師の間像をも、容易に受け入れられたと思う。精神的教育は、主として札幌農学校出身の人であり、専門教育は現在の東京水産大学の前身、水産講習所出身者によって行なわれ、開校当初の水産学校であり、かつ当時は水産王国としての本道唯一のものであることなどより優秀な教師が推せんされて来たことも、大きな力であり、子弟相携えて将来への校風樹立の意欲を横溢せしめたと確信する。菊地さんはかかる雲囲気の、学校教

育の中であって年輩からしても、教育を受ける熱意と真剣さは、校内随一であり自らは勿論同僚並びに後輩の誘導的立場におかれた点からも、一生を通じて禁酒禁煙を実行するなど、己れの信ずることを勇敢に実行する自信が培われたのであろうと思う。学校の生徒数の少いことは、よき場合もありまたその逆のこともあるが、水産学校創設当時2カ年は札幌に在り、札幌農学校を初め、男女中等学校が数多あったので、小人数の学校として、対抗的意識からも、学校教師の熱意と気魄相俟って、精神的教育が徹底されたと痛感する。菊地さんは、水産学校創立当初の、強き教育精神によって培われ、自らも極めて厳格に、自己の人間完成に努められたのであるが、生徒数の少い学校であったそのことが、考えようによっては、菊地さんの一生を支配する真面目の生涯を送る人となられたことだと私は堅く信じる。私が教育界に入って、常に愛読しその実行に自ら強く努力しつつ、また教育の指針として、反復し読み続けた内村鑑三先生が「後世への最大遺物」として熱心に説かれた、その結論に「われわれが正義は終に勝つものにして不義は終に負けるものであるということを世間に発表する者であるならば、そのとおりにわれわれは実行しなければならない。われわれに後世に遺すものは何もなくてもわれわれに後世の人に是ぞというて覚えられるべきものは何もなくとも。あの人はこの世の中に活着ている間は、真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを後世の人に遺したいと思う」と結ばれた。私は菊地さんが永眠されてから、同氏との長い親交を追憶しつ

つ、同氏の一生に最もふさわしいことは、内村先生の説かれた、このことに合致すると判断し、再び全文を繰返えして、心強さを感じたのである。菊地さんの生涯を通じて、あの真面目さ誠実さを思い起す事実は、数限りないと思うが、あの千歳の山中に20幾年、なんの不平不満も洩さず忠実に職務を果されたその一つ一つについては、多くの人が充分に熟知のことであるので、私なりに私の感じたことを述べたいと思う。菊地さんは水産学校を終えると、今こそそんなことなど想像もつかない山奥の、不便きわまりない千歳孵化場に、勇躍して赴任され、生涯を通じ、自己の天職の場所と信じて、働き続けたのである。その間多くの御子さんを、経済的には、恐らく相当の重圧を感じられたことと思われるが、全部実業教育を終了させ、しかし自己の後継者ともいうべくその2人には、水産教育を受けさせたのである。子息たちが現在社会人として、立派にそれぞれの職場に働いておられるが、これはお父さんのお気持ちを、快く受け継がれた、親思う真心の発露の結果であると、深く敬意を表するのである。水産の仕事は掠奪産業であり、あまり将来のことを考えない、大雑把の事業であると批判されることが普通であるが、菊地さんは水産といっても、殖やして獲るといふ孵化事業について、勝れた技術の持ち主であるためであろう。若い時代、すなわち今から30年も前のことと思うが、生涯の生活にたいし、極めて計画性を持っておられたと考えさせられる。菊地さんは機会を捉えて住宅組合に加入され、現在の住宅を15年かの予定にて建築されたことを記憶する。魚類

## 菊地さん あれこれ

※

可香谷政夫

増殖の技術者、すなわち、水産業の永続性を慮る技術指導者として、自己生活の永い将来についても深い考慮が払われたことと思われる。菊地さんが4年前脳溢血かでおれられてから、酒も煙草も全然飲まないのといわれることをよく聞かされたが、私なりにいうならば、長い間の孵化場生活による冬季間の身体ことに手足の冷えのため、菊地さんがよくいわれておった職業病である神経痛かリウマチによって、右脚が犯され、不幸にして医師の注射の誤りか、跛となり長く苦しめられたが、さらにまた左脚も交通事故で骨折し、4カ月の入院療養に悩まされたのである。この再度にわたる災難は、いかなる菊地さんでも、精神面の苦悩によって、心身に大きな痛手を負い、あのような病気となり、それが原因して再び立つことが出来なくなったことだと思う。度々見舞にうかがって、必ず再び元気であの名文も書かれ、また熱のこもった水産増殖、ことに孵化事業についての、博識の意見を聞き得るものと、堅く信じておったのに、惜しい水産界の偉大の功績者であり、社会人として正義の人を失ったものと残念でならない。菊地さんの70年の生涯を通じての仕事にたいする熱意と真剣さを知る人は余りに多いのであるが、私は60年の親交を続けたことから、菊地さんの誠実と真面目さとを、私生活の上から思い浮べて、その偉さを追憶しつつご瞑福を強くお祈りする次第である。

本道さけ・ます孵化事業の恩人菊地さんが、長い闘病生活もむなしく1月24日他界されたが、さけ・ます孵化事業が世界的関心を持たれ、本道が大きくクローズアップされている現在、半生を孵化事業にささげた氏を失なったことはほんとうに残念だと思います。

昭和4年から千歳孵化場に勤務し、親しくご指導を受けた私は数々の思い出があり、その一つ一つが今となっては只々懐しく、菊地さんを偲ぶこと切なるものがあります。

氏は郷里秋田県を20有余歳の時出て渡道し、その年創立された北海道水産学校（元北水協会跡、現在の水産会館付近）に入り、苦学しながら卒業した人で、苦勞しているだけに人間的にほんとうにできた人でした。日曜になると大通り公園（当時は草がポウポウとしていた由）に出掛け、5銭で大福もちを買い、唐詩撰を読みながら涙して一日を送ったという反面、当時の北大の運動会（当時は在札幌の各学校が参加）や出征兵の出迎などに、いつも新設の学校だけに当時の北海中学の後の方に席が取られたことに対し、苟も私立学校の次に片立の学校がおかれるとは何事だとばかり、北中の前の方に出てがんばった由で（校旗がまだきまっていなかったので、上下紫色で真中